



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 60
2008(平成20)年4月12日(土)発行

我が花ですが
なでしこに
ちなんで

＜終戦の年の1945(昭和20)年4月12日、福島県郡山市が空襲された日＞
終戦の年の4月12日、午前10時30分から11時頃までの約30分にわたり、郡山市は米軍のB29攻撃機143機の空襲をうけ、保土ヶ谷化学工場、日東紡第三工場、日東紡富久山工場などが大きな被害をうけます。日東紡富久山工場では、原町女学校生(現在の原町高校前身校)120名が動員されていて、この空襲に遭遇。工場では死者121名、重傷者27名を出しますが、原女生は3名の負傷者だけですみました。



動員中に郡山空襲に遭う
原町区長 阿部信子

今の子供よりも幸せだったかも

私は一九二八(昭和三)年生まれで、今年八十歳。子供三人、孫九人に囲まれるおばあさんとなりました。
今から七十年前も前の私たちの幼年時代は、自然を友に、川の流れて魚をとったり、水泳ぎをしたり、草や木の実で遊び道具を作り、また隣どうしの友と棒を持って追いかけて遊んだこと、テレビと勉強に釘づけされていた今の子供に比べずと幸せだったのではないかと思われます。

女学校では授業をつぶし農作業などを行う

でも青春時代の真只中であつた私達は、昭和十七年四月、原町高等女学校に入学するや、戦争のため学校の授業をつぶし勉強どころではなく、出征兵士の農家の田植えや稲刈り、麦刈り、塩作りなど何でもやりました。大東亜戦争も激しくなり、いろんな制度がしかれ、義勇軍とか、軍属とか、挺身隊とかの名前がつけられ、あらゆる面からお国の為必ず勝つとばかり信じ召集されたのでした。

郡山の日東紡工場に動員

とうとう私達、現役の在学生にも学徒動員令がしかれ、三年生の十月に、原女第十七回生の校友百二十名とともに、郡山の日東紡績富久山工場に行くことになりました。嬉しいのか寂しいのか無邪気な年頃で、トランク片手に、炒り豆を入れた救急袋と防空頭巾を肩にして、原の町を後に親元を離れ郡山へと向かったのです。

工場の寮に入った私達は、十二、三人づつ部屋割と職場の割振りをして貰い、せんべい蒲団に身を休めたのです。どうすればいいのかわりもかも未知のことばかり、ただお国のために働かなきゃとばかり

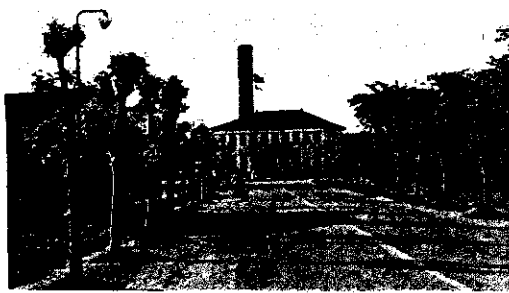
に張り切ったものでした。

「流汗鍛錬同胞相愛」

工場には聖堂があり、週一回の朝礼では、秀瀬日吉工場長を中心、「人よ醒めよ醒めて愛にかえれ、愛なき人生は暗黒なり」と、また合掌した両手をお腹に叩きつけ、力いっぱい「流汗鍛錬同胞相愛」と繰り返し唱え、一日のスタートを切ったのです。

皆、厳しい寒さと空腹に耐え、私はロックウール(岩綿)の仕上げの職場でした。板にしたロックに寒冷紗(目の粗い綿布)をコンニヤク糊にて張り付け、乾燥室で乾かし、防音用を使用するとか聞いておりました。

(裏面へつづく)



▲現在の郡山市日東紡富久山工場正面



▲集会などで「流汗鍛錬同胞相愛」と唱えた聖堂(講堂)。しかし、空襲後は遺体安置所や負傷者収容所になる。



空襲前の日東紡績富久山工場全景

○この福島県原町高等女学校第17回生(132名・担任1組高原(亀田)美代・2組鈴木千代子先生)の同窓会は、当時の校長半谷虎雄先生が教訓としていた「大和撫子の精神」から「なでしこ会」と名付けられています。

昭和二十年四月十二日の大空襲

ところが、米軍の攻撃もだんだんと本土に近づいてきて、各地での玉砕が報道され、郡山市の我が軍需工場にも、突然B29の大編隊が襲ってきたのです。

ギラギラのB29がもう頭の上に来ている

昭和二十年四月十二日のことでした。まもなくお昼になろうとしていた頃、空襲警報が鳴り渡り、もうその時は頭の上にはギラギラのB29がきていました。これは大変と、思う間もなく、ドシンと爆弾の雨あられ。あわてて防空壕へと入る。続け様にドシン、ドシンと、たちまち防空壕は崩れ落ち、下敷きとなったのです。

でも必死に頭の上の土を掻きはらい、やつとの思いで這い上がって見た様は、それはそれは、工場は火の海、周り

には血だらけの人が泥まみれでうめき声をあげている悲惨な状況でした。

僅かしか離れていない田んぼには大きな穴、どうしていいやら、泥沼化した田んぼの中を機銃を浴びながら走り抜けました。やつとのことで静まったと思った頃に、田んぼの土手に坐って、救急袋のゴマ塩を一なめした時の、その味は今でも忘れられませんが、夕方になつて皆はどうしたかなと思いつつ、ただ呆然としてうろつき、厳粛であるベキ聖堂いっばいに横たわった人々、何がどうなっているのかわからないうまま、さまよいました。

原女生にも負傷者が出て

後になつて、木野田愛子さんと相田文子さんが同じ防空壕に入り生き埋めになり病院と聞き、自分も痛む足を引きずりながら寝巻きを持つて見舞いでしたが、自分ばかり逃げまわつて、私は本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

焼け残った寮では、会津の耶麻女学校の犠牲者の通夜が行われていました。亡くなられた方のご冥福をお祈りするのと同時に、我が原町女学校の友には負傷者が出ましたが、一人の犠牲者もなかったことにほつとしました。

英語教育に不満と悔いも

やがて終戦を迎えた私達は、又本業の学校の授業へと戻りましたが、勉強に身が入らず、特に敵国語の英語等は全く分からず、不満から誰言うとなく白紙同盟を実行したこともあります。今になってアルファベットの読み書きも

四十年ぶりの同窓会

出来ず、横文字の多い今日、不便を感じるばかりです。

終戦から三十八年がたち、私達第十七回生は「なでしこ会」と名付けて同窓会を修学旅行と銘打って開催。東京・横浜・箱根方面で郡山動員や空襲の話題に明け暮れました。そしてさらに、四十年ぶりの昭和六十年に富久山工場を訪ねることになり、同じく当時動員生だった川俣工、磐城女の三校合同同窓会を感激のうち開催しました。

また当時の悲惨な戦争体験を二度と子や孫に繰り返させないために文集に残しておこうと話が進み、動員生と、当時の引率の先生方や関係者の思い出を綴り、一冊の本『学徒動員から四十年』として発行することができました。

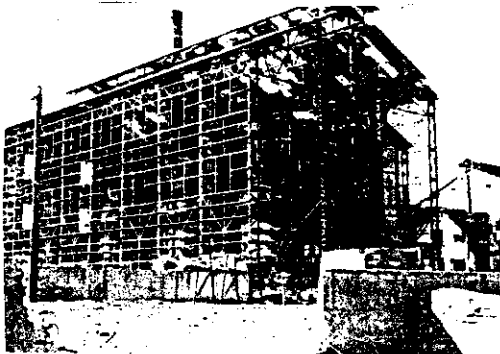
学徒動員から40年

一部山崎英樹氏提供



原町女子高等学校女子部員17期生

▲1985(昭和60)年に発行された『学徒動員から40年』。阿部さんら原町女学校生と引率教師など50名の郡山空襲の体験記録集です。



▲空襲後の富久山(硫酸)工場



▲動員生を引率し、苦労をともにされた原町女学校の先生方。上右から高原美代・鈴木千代子・前川嘉雄、下右から稲村きく・目迫豊・松崎節子の各先生。

▼40年ぶりに工場を訪ね、当時の工員さんにも再会。新聞などでも大きく報道されました。

